

---

# うどん

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うどん

### 【Nコード】

N8047E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

日本でうどんを食べたニュージールランド人の夫婦。帰国して早速自分達もうどんを作ってみるが何かが違う。それはどうしてか。外国でもうどんは人気があるそうです。

## 第一章

うどん

日本に来たのは只の旅だった。最初は。

ウツディ・アレン。ニュージールランド人で趣味はラグビー。その趣味が物語るように大柄で逞しい身体つきをしている。今はプロレスラーでありトラックの運転手もしている。とりあえず食べる量は桁外れに多い。

そのせいで日本に来て。彼は非常に困っていた。

「なあワンダ」

「どうしたの？ウツディ」

自分より四十センチも低い妻に対して声をかける。妻のワンダは大きな口を持つ緑の猫に似た目にブロンドをたなびかせたはつきりとした顔立ちの女性だ。少しマオイの血が入っている。確かにアレンと比べると背は低いがそれでも日本人の女性と比べればかなり高い。何しろアレンは二メートルを超えているのだからそれは仕方がなかった。その夫の言葉に顔を向けたのだ。

「日本は僕にとっては困った国だね」

「どうしてなの？いい国じゃない」

何を言っているんだといった顔で夫に顔を向けてきた。

「綺麗だし人情はあるし」

「食べ物がね」

困った顔で妻に答えた。

「それがどうも」

「美味しいじゃない」

やはりここでも何を言っているんだといった顔になる。

「繊細な味で。ニュージールランドにないような」

「量が少ないよ」

彼はそれを言う。

「高いしね、それに」

「量ね」

「僕には少な過ぎるよ」

その巨大な体格を屈ませて言う。見ればその身体はあまりにも大きい。道行く日本人達と比べてあまりにも大きく必然的にかなり目立ってしまっていた。

「あれっぼっちじゃとても」

「じゃあ。また食べるの？」

「うん」

こう妻に答える。

「何かね。ある？」

「あることはあるわ」

ワンダもすぐに言葉を返してきた。

「一応は」

「ライスかな」

「ライスがいいの？」

「いいけれどやっぱり日本のライスは」

「ここでもまた困った顔を見せる。」

「どうにも量が少なくて」

「困ったわね。じゃあ何がいいのよ」

「だからお腹にたまるものだよ」

やはりこれだった。

「さもないと身体がもたないよ。だから」

「そんなに言うんだったら」

「ここでまた周りを見回す。それで見つけたのは。」

「ああ、いいのがあったわ」

「何？」

「ほら、あれ」

ここで丁度目の前にある店を指差した。そこは木造の見事な和風の建物であった。如何にも日本のものという雰囲気醸し出してさ

えいる。

「あれってどうかこのお店ね」

「ああ、このお店なの」

「うどんがあるじゃない」

「うどん!？」

「ヌードルの一種よ」

こう夫に対して答える。

「簡単に言えば」

「ヌードルねえ」

「といつてもパスタじゃないわよ」

これは断りを入れる。

「わかるわね」

「一応はね」

ぼんやりとだがこう妻に答えた。

「ああしたものじゃないっていうのは」

「日本のヌードルよ」

あらためてこう夫に説明する。

「美味しいらしいわ」

「らしいの」

「私も食べたことはないのよ」

実はそうなのであった。ワ نداにしるアレンにしる日本語は学んでいるがそれでも食べ物までは学んでいないのである。それはこれからであったのだ。

「だから。はじめてよ」

「じゃあ食べてみる?」

「ええ。お箸だけほしいわよね」

「一応は」

やはりぼんやりとした返事であった。

「いけるよ」

「だったらいいわ。行きましょう」

「うん」

こうして妻の後について行く感じでその店の中に入った。店の中もまた和風そのものであり畳の座敷の席もあれば木造の椅子やテーブルの席もある。カウンターもまた木造であり二人にとっては実に新鮮で目を奪われるものがあつた。既にこの日本で何回も見ていても。

「何処に座ろうかしら」

「カウンターがいいんじゃないかな」

アレンはこうワンダに提案してきた。

「そこに二人でね」

「そうね。それでいいわね」

「うん。それにしても」

アレンは店の中を進みながらその中を見回していた。見回すと共におしながき、つまりメニューを見ていた。そのうえでまた妻に言うてきた。

「ねえワンダ」

「今度は何なの？」

「カうどんって何なのかな」

「カうどん!？」

カうどんと聞いて逆にワンダの方から声があがった。

「何なの、それって」

「知らないの？」

「ええ、全然」

返事はこうだった。

「全然知らないわ。けれど面白そうだね」

「うん」

「じゃあ私はそれにするわ」

ここで丁度カウンターのところに来た。いい具合に席が空いていた。

「カうどんね。あなたはどうするの?」

「そうだね。僕は」

二人は椅子を引いてそこに座る。座りながら話を続けていた。

「あれがいいな」

「あれっていうと」

「ほら、ビッグうどん」

メニューの端にそんな名前のものがあった。

「あれがいいよ」

「やっぱり量なのね」

「だからお腹が空いて仕方がないんだよ」

こう述べて右手で実際にそのお腹を押さえてみせる。表情も困り果てたものになる。

「本当にね」

「仕方ないわね、そればかりは」

「人間食べないと死んじやうよ」

続いての言葉はこうであった。

「だからさ。余計にね」

「わかったわ。じゃあそれね」

「うん」

これで話は決まりであった。二人はそれぞれメニューを注文した。それで出て来たのは。

「あらっ」

まず声をあげたのはワンダだった。

「カうどんってこれだったの」

「あれっ、これって」

「お餅よ」

ワンダはこうアレンに答えた。見ればワンダの前にあるうどんには白い餅が数個浮かんでいる狐色と黒の焼けた色がまた実に食欲をそそる。

「これはね」

「そうなんだ、これもお餅なんだ」

「お菓子のお餅とはまた違つたのよ」

ワンダはこう夫に対して説明する。

「これはね」

「そうなんだ。これもお餅なんだ」

「お餅って言つても色々よ」

また言う。

「こつしたお餅もあるのよ」

「成程ね」

「ほら、貴方のところにも」

ここで彼女は夫のうどんの丼を指差す。見ればそれはかなり大きい、ワンダのそれよりも優に三倍はある大きさの巨大な丼であった。

「見なさいよ」

「あっ」

「入ってるわよね」

「うん、確かに」

見ればその通りだった。彼のところにも餅が入っている。他には若布や葱、鶏肉、揚げと実に多彩だ。とにかく具は何でも入っていると聞いた感じのうどんである。

「美味しそうじゃない」

「確かに。それじゃあ」

「ええ、食べましょう」

「うん」

こつして箸で食べはじめた。アレンは最初は戸惑っていたがやがて口の中にそれを入れると。彼の表情は瞬く間に一変したのだった。



## 第二章

「んっ!？」

「どうしたの？」

「美味しい」

一言であった。

「この美味しさ、何なんだ」

「確かに美味しいわね」

ワンダもそれに同意して頷く。

「このうどんは」

「こんなの美味しいものがあるんだ」

彼はこうまで言う。完全にうどんに魅せられてしまっていた。

「世の中に」

「ちよつと大袈裟じゃないの？」

いい加減夫があまりにも大袈裟なので突込みを入れた。

「確かに美味しいけれど」

「いや、本当だよ」

しかし彼はまだ言う。

「この美味しさ。有り得ない」

「惚れたのね」

「君と同じ位にね」

今度はおのろけだった。

「それはね」

「私と同じ位にっつて」

呆れるどころではなかった。

「何が何なのか」

「わからないの？だからそこまで美味しいんだよ」

言いながらさらに食べていく。うどんをずるずると飲んでいく。

うどんを瞬く間に食べていきそれが終わったその時に。彼は言うの

だった。

「おかわり」

「おかわり？」

「うん、もう一杯」

もう一杯注文するのだった。

「貰えるかな」

「凄いわね」

ワンダは夫の丼をのぞく。見ればそこには汁の一滴も残ってはいなかった。本当に見事なまでに食べ終えてしまっていた。しかもそこにおかわりである。凄いいことだった。

すぐにもう一杯が来てそれも食べる。やはり凄まじい勢いで食べていく。食べ終わると流石に満足したのかお腹に右手を置いて大きく息を吐き出すのだった。

「ふう」

「満腹したのね」

「うん」

まずはにこりと笑って妻に答える。

「これでね。流石にね」

「うどん六玉分よ」

ワンダが言ってきた。

「それだけ食べればね」

「何かさ、日本に来てはじめて満腹したかな」

「こつも答える。」

「今日はね。幸せだよ」

「おうどんは気に入ったみたいね」

「そうだね」

その問いにも答える。

「いい感じだよ、本当にね」

「それにしても驚いたわ」

見ればワンダはまだ一杯目を食べている。そのうどんを少しずつ

睨りながらの言葉だった。

「ウツデイがここまで惚れ込むなんて」

「決めたよ、僕は」

今度はいきなりこう言ってきた。

「決めたって？」

「日本にいる間はずっとこのうどんを食べていたいよ」

見れば顔は完全に本気だ。どうやら完全にこのうどんに惚れたらしい。

「それはそれでいいけれど」

「じゃあいいんだね」

「ええ」

アレンの言葉に対して頷いて答えた。

「何度も言うけれど私はね」

「そう言ってもらって何よりだよ。流石に今は食べないけれどね」

「もう一杯食べたら本当に驚くわ」

ワングの今の言葉は本気だった。

「まさかね」

「そのまさかはないよ。ただ」

「ただ？」

「いや、本当にこんな美味しいものがあるなんてね」

またうどんを褒める。

「思いもしなかったよ。これなら何杯でも食べられるよ」

「何杯もなのね」

「そうだよ。うどんがこんなに美味しいなんて」

うどんを褒める言葉が続く。

「思わなかったよ。本当にね」

「美味しいのは確かね」

これはワングも認めるところだった。

「レシピとかも調べてみたくなったわ」

「そうだね。けれど今は」

「お店を出るのね」  
「日本では食べたらずぐに出るんだったよね」  
「そうよ」  
こうアレンに対して答えた。  
「イタリアやスペインとは違ってね。大体そうよ」  
「それじゃあ」  
その言葉を受けて立ち上がった。  
「行こう」  
「わかったわ。ただ」  
「ただ。どうしたの？」  
「お金を払ってからね」  
このことは忘れるわけにはいかなかった。夫にもそれを言う。  
「それからでいいわね」  
「ああ、そうだったね」  
実はそのことはかなり忘れてしまっていたアレンであった。  
「それはね」  
「忘れたら日本の警察は厳しいわよ」  
二人も日本の警察については知っていた。その厳しさも。  
「覚悟が必要な位ね」  
「別にそれは厳しくなくてもいいのに」  
「そういうわけにはいかないわ。それじゃあ」  
「うん」  
それでも妻の言葉に頷く。  
「お金を払ってね。それからね」  
「わかったよ。そういうことだね」  
こうしてお勘定を払って店を出た。だがこれがはじまりとなって彼は日本にいる間は朝昼晩全てうどんであった。とにかくうどんばかりを食べていた。

### 第三章

朝にはまず立ち食いで昼や夜は普通の店に入って。とにかく食べまくった。それは今もであった。

「うどんといっても色々ね」

「そうだね」

またうどんを食べている。今度は鍋焼きうどんだった。二人でそれぞれ土鍋を前に置いてはふはふと汗をかきながらそのうどんを食べていた。

「ただ。大体わかったよ」

「何が？」

「おつゆだったっけ」

まずはつゆについて言う。

「このスープは」

「ええ、そうよ」

ワンダは夫の問いに答えた。

「おこのおつゆはあれだね。お醤油で味付けしているよね」

「そうよ、和食だからね」

夫の問いに素直に述べる。

「それはわかるわよね」

「うん、ただ」

「ただ？」

「本当に不思議な味だよ」

鍋焼きうどんのそのおつゆを飲みつつ妻にまた述べる。

「この味は。何ていうかな」

「詳しい味を知りたくなっただの？」

「どうやってこんな味になるんだらう」

首を捻りつつ述べる。

「ええと、中国の麺類とかはあるじゃない」

「ええ」

「ニュージーランドにもチャイナタウンがある。チャイナタウンはそれこそ世界中にある。ツイ最近までないのは韓国だけとまで言われていたのであるが最近できたようである。」

「あれは豚とか鶏の骨から味を取っているけれど」

「このおうどんは何かしらね」

「まずそれがわからないよ。本当に日本の味らしいけれど」

「お味噌を使ったものもあったわね」

「味噌煮込みうどんだったっけ」

「二人は既にそれも食べていたのである。」

「あれは凄かったね」

「そういうのもあればね。こうしたおうどんもあるし」

「凄いよ。ただ」

「ただ？」

「本当にこのだしは何なんだろう」

首を傾げつつ味わつての言葉であった。

「美味しいけれど。それがわからないや」

「本屋さんがあるじゃない」

「ワンダは自分達が日本語を使えるということをごここで最大限に活用することにした。それをまずは本に対して使うことにしたのである。」

「そこに入って本を買えばわかるわよね」

「うどんに関する本だよ」

「そうよ。買ってみる？」

「そうだね」

妻の言葉にすぐに答えてみせた。

「ここはね。是非知りたくなつたよ」

「食べるだけじゃなくて知りたくなつたのね」

「だって。あまりにも美味しいから」

そのうどんの麺をすすりつつ述べる。

「だからだよ。美味しいのは罪なんだよ」  
「罪なのね」

「そうだよ。何かを知ることが罪っていうんならね」  
笑つての言葉だった。これは実にキリスト教的な考えであった。  
キリスト教では知るといふことは罪であるという考えが確かに存在している。あの林檎の話である。

「これは立派な罪だよ」  
「ウツデイにとっては林檎じゃなくてうどんだったのね」  
「本当に。美味しいから」

それをまた言う。完全に取り憑かれている。

「だからだよ。知りたいよ」

「じゃあ決まりね。食べ終わったら」

「本屋にね。それでこの麵についても調べようよ」

「わかったわ。それじゃあね」

「うん」

こうして二人はうどんに関する本を買うことにした。それも何冊も買いそれで調べてみた。その結果二人にとって実に面白いことがわかったのだった。

「面白いわね」

「そうだね」

滞在しているホテルに戻って最初のやり取りはこれであった。

「海草でだしを摂っていたのね」

「それと・・・・・・鰹節？」

「鰹を燻製にしたものらしいわ」

ワンダは本のうちの一冊を読みながら夫に説明する。

「和食ではよく使うらしいわ」

「ふうん、それを細かく切ってそれからなんだ」

「手間がかかっているわね」

「そうだね。それに」

アレンもまた本を読んでいる。その中でまた言うのである。

「見てよ、干した魚までだしに使ってるよ」

「想像以上に変わってるわね」

「変わっているっていうか信じられないよ」

ニユージーランド人の彼から見ればこう言うしかないものであった。彼にしる妻のワンダにしる今までこうした和食は食べたことがない。だからこれも当然だった。

「それに麺だつてね」

「面白い作り方ね」

「パスタとは全然違うね」

「練ってそれから粉をまぶした上で包丁で切っていくらしいわね」

「何処か中国のそれに似ているね」

「ええ」

実は二人は中華料理は食べたことがあるが和食は殆どないのだ。それでこうした和食にとっては基本的な話も全く知らなかったのである。

「麺に関してはそうね」

「それでも。とにかく独特だよ」

「けれど美味しいのは確かね」

「うん」

妻の言葉にまた頷いてみせる。そのうえでまた言うのだった。

「ところでね」

「どうしたの？」

「これ、日本でしか食べられないのかな」

彼はそのことを心配していたのだ。



## 第四章

「ひよっとしたら」

「近所にあつたかしら」

ワンダも夫の言葉を聞いてそのことを考えた。

「和食のお店って」

「その前にうどんがある？」

「さあ」

実はマークしていない。だからわかる筈もなかった。

「見たことないわね」

「参ったな。じゃあ食べられないよ」

彼はそのことを思っただけで困り果てた顔になってしまった。

「近所じゃないんじゃ。どうしよう」

「作る？」

ワンダはふと夫に対して言ってきた。

「作るって？」

「だから。自分達だよ」

こう夫に提案するのだった。

「このうどんを。どうかしら」

「僕達で作るの」

「なければ作るしかないわ」

また随分と積極的な意見であった。

「そうでしょう？だからよ」

「作るんだ」

その言葉を聞いて今一つ積極的でなさそうなアレンだった。

「できるかな、僕に」

「ウツディ」

ここでワンダは優しい笑みを浮かべて夫に対して言ってきた。ベツドの上に二人並んで座っているのもその顔が実によく見える。

「弱気は駄目よ」

「駄目なんだ」

「それよりもやってみることよ」

「やってみるんだね」

「そういうことよ。最初は駄目でもいいじゃない」

あえて失敗を述べてみせるのだった。

「それでもね。やらないとね」

「そうかな」

「そうよ。どうかしら」

ここまで言ってアレンの顔を覗き込んできたのだった。

「やってみるってことで」

「そうだね。じゃあそれで」

アレンも納得した顔で頷いくのだった。

「ニュージージーランドに帰ってみたらやってみようか」

「そうね。是非にね」

こう言い合って約束するのだった。そうしてニュージージーランドに帰ると実際に。二人は早速材料を買い集めて自宅でうどんを作り出したのだった。

アメリカ風の見事なキッチンにおいて。二人は並んで立って仕事にかかるのだった。キッチンには既にうどんの材料が全て置かれている。

「はじめるんだね」

「ええ。まずは」

「だしを取ってうどんをこねて」

「はじまりから随分大変ね」

ワンダは困ったような笑みを浮かべて言葉を返すのだった。

「手間がかかるっていうか」

「手間がかかるのが和食なのよ」

また夫に対して述べる。

「それはね。どうしてもね」

「やれやれって感じだけねど」

「どうしたの？」

「これはこれで楽しいね」

こう述べるアレンであった。

「何かね。大変でも」

「そうね、確かにね」

アレンはうどんをこねワンダはだしの用意をしていた。用意をしつつ話をしていたのである。水を入れた鍋に煮干に昆布が入れられていっている。

「楽しいわ」

「そうだね。何か好きになってきたよ」

額に汗をかきつつ妻に言葉を返す。汗を左手でぬぐう。

「少しずつだけねど」

「好きこそものの上手なれだったかしら」

ワンダはふとした感じで言ってきた。

「日本の諺、いえ言葉で」

「日本のだった」

「日本の料理を作っているからやっぱり日本の言葉よね」  
夫にまた述べてみせる。

「そうじゃないかしら」

「そうだね。日本のだしね」

「そういうことね。じゃあ少しずつね」

「作っていいこうね」

こう言い合ってうどんを作っていく。こうしてうどんを完成させた。二人はテーブルで向かい合って座りそのうえで食べ合う。まずはそれぞれ箸を手に取った。

うどんは和風の丼に入れられている。黒っぽいゆの中につごんがありそこに切られた蒲鉾と葱が置かれている。雰囲気も出ていた。そのうどんを見てアレンは。感慨を深くさせて言うのだった。

「いや、かなり美味しそうだね」

「そうね。日本のうどんと同じね」

「そうだね。茹で加減はこれでよかったわよね」  
「多分ね」

「そう。だったら」

「ええ。食べましょう」

こう言い合ってから箸を手に食べはじめた。まずは麺を口に入れた。するとその瞬間にアレンの顔色が微妙に変わってしまった。

「あれっ!?!」

「何か違うわね」

「うん、違う」

ワンドも同じものを味わった。そのうえでの二人の言葉だった。

「美味しいけれど何かがね」

「どうしてかしら」

「茹で加減はこれでいいし」

「だしもちちゃんと取れているわ」

二人は事前によく勉強して打ち合わせもして料理をしたのだ。そのかいあって味自体は悪くなかった。しかしそれでも、何かが違うていたのだ。

「何だろう、おかしいよね」

「そうね、どうしてかしら」

「あの味じゃないね」

アレンはまた言う。

「日本の味じゃないわ」

「どうしてかな。これって」

「わからないわ。ただこれじゃあ」

ワンドも言葉を続ける。

「あの味じゃないから。駄目よ」

「そうだよ。どうしてなんだろう」

二人は顔を見合わせて言い合っていた。それがどうしてかは全くわからない。これは何度作っても同じだった。それで二人は思い

詰めてしまっていた。

## 第五章

困り果てた二人はまた色々と勉強しだした。地元の人達にそのう  
どんも食べてもらってみた。おおむね評判はよかった。だが一人だ  
け違和感を顔に見せる人がいた。それは。

「ううん」

「あれ、この方は」

「どなたなの？」

二人もはじめてみる顔だった。小柄なアジア系の初老の男であつた。彼は手馴れた箸捌きで二人が作ったうどんを食べて難しい顔を  
していたのだ。二人は彼を見て知人に問うた。

「あの、この方は」

「日本人なの？中国人なの？」

「日本人よ」

二人の隣に一人で住んでいる白髪の老婆ジュリが答えてきた。

「日本人！？」

「ええ、この前引つ越してきたばかりなのよ」

日本人と聞いて驚きの声をあげたアレンに対してまた答えた。

「この辺りにね」

「そうなの。日本人なのね」

「それがどうかしたの？」

「御名前は何ていうのかしら」

ワンダがジュリにかなり積極的に尋ねてきた。

「よかったら教えて」

「浜崎といます」

その日本人の方から答えてきた。穏やかで飄々とした感じの笑顔  
であった。

「浜崎さんですね」

「ええ、仕事の関係で引つ越してきました」

こうワンダに説明する。

「宜しく御願います」

「わかりました。ところで」

ワンダは早速その日本人浜崎に尋ねてきたのだった。

「このうどんはどうでしょうか」

「どうでしょうか」

アレンも同時に問うてきた。それぞれ身を乗り出して彼に問う。

「そうですね。美味しいことは美味しいです」

「そうですね」

「ただ」

首を捻ってまた言ってきた。

「少し足りないですね」

「やっぱりそうですね」

アレンはそれを聞いてやはりという顔で頷くのだった。日本人に言われて完全に納得したのである。

「日本の味としては」

「ええ、何故か日本の味にはならないんですよ」

アレンはその巨大な身体を小さくさせて浜崎に答えた。まるで別人の様に小さく見える。

「どうしても」

「ですがそれも当然です」

「当然!？」

「はい、ここはニュージーランドです」

浜崎はこのことを言った。

「日本ではありません」

「それはそうですね」

「そしてここにおられる方はニュージーランド人です」

当然と言えば当然のことと言っまでもない。しかし彼はそれをあえて言うのである。

「ですからこれでいいと思いますよ」

「それはまたどうして」

「日本の味がありますね」

「はい」

それはよくわかっていいる。それに惚れ込んでうどんを作っているからだ。しかしそれが今否定されようとしていた。しかし何故が悪い気持ちはしなかった。それどころかカタルシスめいたものさえ感じていた。アレンだけでなく妻のワンダも。二人しれである。

「それならばニュージージーランドの味もあります」

「ニュージージーランドの味も」

「つまりニュージージーランドのうどんもあるということですよ」

浜崎はこう述べた。

「それでいいのではないのでしょうか」

「それでいいのですか？」

「私はそう思います」

そうアレンに対して述べるのだった。

「それで」

「そういうものですか」

「日本だってそうですよ」

その日本のことを話す。紛れもない日本のことをだ。

「場所によって様々な味がありますし」

「そうなのですか」

「それは気付かれませんでしたか」

「はあ」

「それは」

ワンダも答えた。実は彼女もそこまで気付かなかったのである。

「そうだったんですか」

「ええ、そうなんですよ」

浜崎は温厚に二人に語る。そこには嘘も偽りもなく本当の言葉があった。その本当の言葉を今二人に対して語るのであった。だからこそ説得力もあった。



「ですから」

「このままでいいんですね」

「そうです。このままより上を目指されれば」

「上を？」

「味です」

そのニュージーランドのうどんをすすりながら二人に述べた。

「味はもっともっとよくなりますよ」

「今よりもですね」

「果てがないものですから」

味についてはこう述べる。それもまた二人にとっては雷の様に衝撃的な言葉だった。それを聞くだけで何か別世界にいるようにさえ思えるのだった。

「ですから」

「このままこの味を極めていくと」

「その通りです。ニュージーランドのうどんの味を」

「わかりました」

アレンは聞いている方が気持ちのいい声で答えた。まるで雨空が急に晴れ渡ったかのように。爽やかな声で答えたのだった。

## 第六章

「じゃあこのままニュージージーランドのうどんを作っていきます」

「はい、それでいいかと」

「二人で」

そのうえでこうも言うのだった。

「妻のワンダと一緒に」

「そうね」

横にいるそのワンダもにこりと笑って夫のその言葉に応える。

「一人じゃないからね、私達は」

「そう、二人だから」

アレンは妻に対しても言う。

「やっていこう、二人でね」

「そうね。ニュージージーランドのうどんを作っていきましょう」

二人で言い合う。今それが固まった。

「もっといいうどんの為にね」

「うん、そうしようよ。二人で」

「御二人ですか」

しかしここで浜崎は二人の言葉に対して尋ねるのだった。

「はい？」

「そうですけれど」

二人はその言葉に目を丸くさせて答える。二人でなくて他に誰がいるのかしら、こう思って浜崎に対して問い返しもした。

「二人でなくてどうして」

「一人ではとても」

「二人でずっとでしょうか」

その穏やかな笑みで二人に対して問うのだった。

「ずっと。二人ですか」

「あっ、そうですね」

最初に気付いたのはワンダだった。

「それは」

「そういうことです」

気付いてはっとした顔で頷くワンダに対してまた言う。

「ですから」

「そうですね。二人じゃなくりますね」

「!？ワンダ」

まだよくわかっていないアレンは目をしばたかせながら妻に尋ねた。

「二人じゃなくなるって。どういうことなんだい？」

「だからね、アレン」

ワンダもまた穏やかな笑みになって夫に言うてきた。

「子供よ」

「子供……」

「あなたずっと二人だけでいたくないでしょ」

そしてまた言うてきた。

「二人だけなんて」

「二人だけじゃなくて子供」

次第に言葉が彼の中に入っていく。浸透するように。それと共に少しずつだがわかってきた。それを察してようやく述べるのだった。

「ああ、そういうことなんだね」

「わかったわね」

「ああ、やっとわかったよ」

また晴れやかな顔に戻って答えた。

「そうだね。確かに二人じゃないね」

「そうよ。何時かは子供達ができてね」

「子供達にもうどんを教えてあげようよ」

「そういうことよ。いいわね」

「うん」

満面の笑顔でワンダの言葉に頷く。これが二人のうどんのはじま

りだった。それから数年後――

ニューヨークランドクライストチャーチ。そこに一軒のうどん屋があった。そこに入った日本人観光客はまず気のいい奥さんに案内されたのであった。

「いらつしやいませ」

「いらつしやいませ!？」

まずはその言葉に驚く。この観光客は若い娘だ。大学生かOLであろうか。白いシャツに青いジーンズというラフな身なりだ。茶色の髪を後ろで束ね結構濃いめの化粧をしている。青いアイシャドウが印象的である。その彼女が驚いていた。

「日本語喋れるんだ」

「喋れますよ」

その奥さんワンダはにこりと笑って日本人に答える。店は外観も内装も純和風だ。日本人にとっては非常に馴染みのあるものであった。

「勉強しましたから」

「そうなんですか」

「お客さんは英語は？」

「まあ一応は」

だが日本語で応えるのだった。

「ですけどやっぱり日本語の方が」

「では日本語でいいですね」

「できれば」

ワンダに対してこう答える。

「それで御願います」

「わかりました。それではそのように」

「はい」

こうしたやり取りの後で店の奥に入る。カウンターに案内されると小さな子供がお盆を持って来た。その上にはお茶があった。

「お茶まであるんですか」

「ただし紅茶ですよ」

「紅茶!？」

「ここはニュージーランドのうどん屋だからそうなんですよ」

カウンターに来ていたワンダはまたにこりと笑ってみせて彼女に答えた。

「だからですよ」

「はあ。そうなんですか」

日本人はそれを聞いてもまだ驚きを顔に見せていた。

「紅茶ですか」

「緑茶もありますけれど」

「いえ、これでいいです」

出されたのでそれでいいとした。断るつもりはなかった。

「それで御願います」

「わかりました。それじゃあそれで」

「はい。ところでですね」

「何でしょうか」

気さくに客に伝えてきた。見れば客は彼女だけではなく店の中に十人程いる。ただし皆白人か南方系の顔である。つまりニュージーランド人というわけだ。日本人は彼女だけらしい。

「今の子供は」

「息子です」

「息子さんだったんですか」

「ええ。小さいけれど店の手伝いもしてくれるんですよ」

「そうなんですか」

またこの言葉を出す。少し呆然とした感じであった。話をしながら和風の碗に入れられている紅茶を飲む。何か微妙に不思議な感じがした。

「それで何を頼まれますか？」

「ええと、メニユーは」

「はい、こちらです」

すぐに和風のメニューを出してきた。英語と日本語でそれぞれ書かれている。娘はそれを少し見た後でメニューを頼んだのであった。「じゃあ天麩羅うどんを御願いできますか」

「天麩羅うどんですね」

「はい」

にこやかに笑ってワンダに告げる。

「それを御願いします」

「わかりました。あなた」

ここでカウンターの右端にいる大柄な男に声をかけた。見れば山の様な大きさである。

「天麩羅うどん一つよ」

「あいよ」

ここでも日本語だった。娘はその日本語を聞いて日本にいるような気になる。しかしそれは今飲んでいる紅茶により掻き消される。どうにも微妙な感触であった。

## 第七章

暫くしてその天麩羅うどんがやって来た。それは。

「うわ………」

まずはうどん自体を見て驚く。碗が大きくうどんの量もかなり多い。しかも天麩羅がその上に所狭しと置かれているのだ。その量にまず驚いたのだ。

「多いですね」

「ニュージーランドですから」

ワンダはまたこれを言ってきたのだった。やはりにこやかに笑って。

「多いんですよ」

「ニュージーランドだからですか」

「皆大きいですよね」

「ええ、まあ」

これが体格のことを言っているとわかるのですぐに頷くことができた。

「確かに」

「だからですよ。それに」

「それに？」

「後は食べてからです」

「ここから先は今言おうとはしなかった。」

「ですからどうぞ」

「はい………あっ」

ここで娘はまた一つのこと気付いた。うどんの側に置かれているのは。

「お箸とフォーク、スプーンですか」

「お箸使えない方も多いので」

「ですね」

やはりニュージーランドだからだ。これもわかったことだ。

「それはやっぱり」

「そういうことも踏まえまして」

「ええ」

「どうぞ」

「わかりました」

こうして箸を手にしていただきませうの後でうどんを口に入れた。  
すると。

「!?!」

「美味しいですか」

ワンダは微妙な顔になった娘に対して尋ねてきた。

「如何でしょう」

「美味しいです」

微妙な顔であったがこうは答えてきた。

「ですが」

「ですが？」

「少し味が違いますね」

そのうえでこう述べるのであった。

「何か。日本のおうどんとは」

「味付けが違うんですよ」

「そうですね、やっぱり」

「油付けを強くしています」

「そういうことだった。」

「あと味も全体として濃厚に」

「だしとかは日本のですよね」

「ええ、それは」

昆布に鰹にいりこだ。これは押さえてあった。

「唐辛子もありますよ」

「けれどニュージーランド風なんです」

「ええ、ニュージーランドのうどんです」



にこやかに笑って娘に答えた。

「ここにあるのは」

「そうですね。そういえば」

「味が違いますね」

「はい」

今のワンダの言葉には素直に答えるのだった。

「何か前に叔父が言ってたように」

「叔父!？」

今度はワンダが声をあげる番であった。

「叔父といいますと」

「実はですね」

ここで彼女は言うのだった。うどんを食べながら。

「叔父はニュージールランドにいてまして」

「ええ、この国に」

「それで以前ある御夫婦にうどんを御馳走になってお話させてもらったそうなんです。ニュージールランドにはニュージールランドのうどんがあると」

「まさか」

今話を聞いてワンダはピンと来た。それで娘に対して尋ねるのだった。

「その叔父さんの御名前は」

「浜崎といいます」

「やつぱり……!」

ワンダはその名前を聞いてはっと声をあげた。予想した通りだったのだ。

「そうだったんですか。あの人が」

「あの人っていいですよ」

「その人に教えてもらったんですよ、このうどんを」

そのことを娘に対して言うのだった。

「実は」

「そうだったんですか」

「はい、本当に奇遇です」

満面の笑顔になっていた。その笑顔で語っていた。

「まさか。こんなところで」

「そうですか。叔父が」

「叔父さんは今でもここにいられますよ」

「はい、知っています」

にこりと笑ってワンドの言葉に頷いてみせた。

「ここに来たのは会いに来たのも理由ですし」

「そうだったんですか」

「奇遇ですね」

娘の顔が穏やかな微笑みになった。まるで女神の像の様な。

「こんなところで御会いできるなんて」

「そもそも私達がうどんに出会ってこうして作っていることこそが」

「うどんに出会ったことも」

「ええ、そうですよ」

アレンも出て来た。そのうえで娘に話すのだった。

「本当に。世の中何があるのかわかりません」

「そうですね。それは」

「それですね」

アレンはさらに言うのだった。

「今度はですね」

「今度は？」

「叔父さんと御二人で来て下さい」

こう声をかけるのだった。

「是非共御二人で」

「今度は御馳走しますよ」

またワンドも言ってきた。

「きし麺を」

「きし麺もあるんですか」

「ニュージージーランドのきし麺ですけれど」

そこはにこりと笑って前置きされた。

「そうですよ」

「では。是非二人で」

娘もまたにこりと笑って二人に応えるのだった。

「お邪魔させてもらいます」

「それで最後に御聞きしたいのですが」

アレンが娘に尋ねてきた。

「はい？」

「貴女の御名前は」

聞くのはそのことだった。

「宜しければ教えて頂けませんか」

「今後の為にも」

ワンダもそれを尋ねる。

「宜しければ」

「凜子です」

娘はこう名乗ってきた。

「私の名前は。浜崎凜子です」

「凜子さんですね」

「はい」

アレンの言葉に頷く。

「そうです」

「わかりました。じゃあ凜子さん」

アレンはその凜子に対して言ってきた。

「今度は御二人でニュージージーランドのきし麺を」

「楽しみにしています」

もう凜子のうどんは奇麗になくなっていった。麺も天麩羅も見事になくなっていた。ニュージージーランドのうどんもまた美味いということだった。そして今度はニュージージーランドのきし麺に期待を寄せるのであった。次の御馳走に向けて。奇遇が重なってできていったう

どんを。

うどん

完

2008・5・31

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8047e/>

---

うどん

2010年10月8日15時04分発行